

芸 術

1 全般的事項に関する質疑応答

問1 芸術科が育成を目指す資質・能力とは何か。

新学習指導要領における芸術科の目標は、生徒一人一人がそれぞれの興味や関心、個性を生かして、芸術と幅広く、かつ主体的に関わることを重視し、各科目における見方・考え方を働かせ「生活や社会の中の芸術や芸術文化と豊かに関わる資質・能力」を育成することを目指している。具体的には、芸術の幅広い活動を通して、その特質について理解するとともに、自らの意図に基づいて表現するための技能（知識及び技能）を身に付けることや、創造的な表現を工夫したり、芸術のよさや美しさを深く味わったりすることができる力（思考力・表現力・判断力等）を高めること、生涯にわたり芸術を愛好する心情を育むとともに、感性を高め、心豊かな生活や社会を創造していく態度（学びに向かう力、人間性等）を養うことにより、豊かな情操を培うことである。

芸術科の目標の実現に向けては、「知識及び技能」、「思考力・表現力・判断力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱を相互に関連させながら育成できるよう確かな実践を一層推進していくことが求められる。

問2 芸術科における主体的・対話的で深い学びの実現に向けた視点は何か。

芸術科において育成を目指す資質・能力をよりよく育むためには、生徒の主体的・対話的で深い学びが実現するよう、授業改善を行うことが重要である。主体的・対話的で深い学びは、必ずしも1単位時間の授業の中で全てが実現されるものではなく、題材の内容や時間のまとまりを見通しながら行われるものである。例えば、生徒が学習の見通しを立てたり、学習したことを振り返ったりして、自身の学びや変容を自覚する場面（主体的な学びの視点）、対話によって自分の考えなどを広げたり、深めたりする場面（対話的な学びの視点）、学びの深まりをつくりだすため、生徒が考える場面と教師が教える場面（深い学びの視点）をどのように組み立てるか、などといった観点で授業改善を進めることが求められる。

特に、「深い学び」の視点に関しては、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を、習得・活用・探究という学びの過程の中で働かせることを通じて、より質の高い学びにつなげることが重要である。

芸術科においては、各科目における見方・考え方を働かせ、表現及び鑑賞の活動の関連を図るなどして、芸術に関する各科目の特質について理解するとともに、創造的な表現を工夫したり、芸術のよさや美しさを深く味わったりする過程を大切に学習の充実を図ることが重要である。

2 音楽に関する質疑応答

問1 「音楽的な見方・考え方」を働かせる指導とはどういう指導なのか。

新学習指導要領において、芸術科音楽で育成を目指す資質・能力は「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と幅広く関わる資質・能力」と示されている。この資質・能力をよりよく育成するためには、「音楽的な見方・考え方」を働かせながら音楽の特質に応じた学習を展開することが大切である。「音楽的な見方・考え方」とは次のとおりである。

感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、音楽の文化的・歴史的背景などと関連付けること。

音や音楽は、音響そのものを対象として、音楽がどのように形づくられているか、また音楽をどのように感じ取るかを明らかにしていく過程を経ることによって捉えることができる。芸術科音楽の学習では、このように音や音楽を捉えることが必要である。

一方、音や音楽は、生徒自身の音楽に対するイメージや感情（例えば、「この曲を聴くと心が落ち着く」「この曲を聴くと、元気が出てくる」等）、その音楽が作曲された文化的・歴史的背景との関わりの中で人間にとって意味あるものとして存在している。したがって、これらに関わらせながら学習を行うことで、音楽表現を創意工夫したり音楽を解釈し評価したりするなどの学習が深まっていく。

芸術科音楽においてこのような「見方・考え方」を働かせながら学習を行うことにより、実感を伴った理解による「知識」の習得、必要性の実感を伴う「技能」の習得、質の高い「思考力・判断力・表現力等」の育成、人生や社会において学びを生かそうとする意識をもった「学びに向かう力、人間性等」の涵養が実現され、音楽科の目指す「生活の中の音や音楽、音楽文化と幅広く関わる資質・能力」がよりよく育成されることとなる。

問2 音楽の〔共通事項〕をどのように扱えばよいのか。

新学習指導要領では、全ての領域において共通となる指導事項を〔共通事項〕として新たに示し、その趣旨と重要性を一層明確にしている。

ア 音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きを感受しながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考えること。〔思考力、判断力、表現力等〕

イ 音楽を形づくっている要素及び音楽に関する用語や記号などについて、音楽における働きと関わらせて理解すること。〔知識〕

アの指導に当たっては、様々な要素が関連し合って音楽が形づくられていることに留意し、各領域の指導事項と関連付けながら、本事項を全ての学習の支えとして、学習を充実させることが大切である。

イの指導に当たっては、アの学習と関連付けることにより、音楽に関する用語や記号の働きを実感しながら理解し、表現や鑑賞の学習活動に生かすことができるよう配慮することが大切である。

3 美術に関する質疑応答

問1 美術における「造形的な見方・考え方」とは何か。

造形的な見方・考え方とは、美術の特質に応じた物事を捉える視点や考え方として、表現及び鑑賞の活動を通して、感性や美意識、想像力を働かせ、対象や事象を造形的な視点で捉え、自分としての意味や価値をつくりだすことが考えられる。今回の改訂では、造形的な視点を豊かにもって対象や事象を捉え、創造的に考えを巡らせる資質・能力の育成を重視している。

造形的な視点とは、造形を豊かに捉える多様な視点であり、形や色彩、材料や光などの造形の要素に着目してそれらの働きを捉える、いわば「木を見る視点」と、全体に着目して造形的な特徴などからイメージを捉えたりするなどの、いわば「森を見る視点」の両面から造形的な視点を豊かにすることが重要である。そして、発想や構想をする場面、創造的に表す技能を働かせる場面、感じ取ったり考えたりする鑑賞の場面のそれぞれにおいて、造形の要素の働きについて意識を向けて考えたり、大きな視点に立って対象のイメージを捉えたりできるようにし、表現及び鑑賞の学習を深めることができるようにすることが大切である。即ち、造形的な視点は、美術の特質に応じた物事を捉える視点であることから、科目で育てる資質・能力を支える本質的な役割を果たすものである。

問2 「B鑑賞」における今回の改訂の内容と、指導する上で留意することは何か。

今回の改訂では、「B鑑賞」の指導内容を、「美術作品など」に関する事項と、「美術の働きや美術文化」に関する事項に分けて示された。

「美術作品など」に関する事項では、造形的なよさや美しさ、目的や機能との調和のとれた洗練された美しさ、映像メディア表現の特質などを感じ取り、作者の心情や意図と創造的な表現の工夫について考え、見方や感じ方を深めることを重視している。

「美術の働きや美術文化」に関する事項では、環境の中に見られる造形的なよさや美しさ、文化遺産などから美意識や創造性を感じ取り、生活や社会を心豊かにする美術の働きや日本及び諸外国の美術文化などに対する見方や感じ方を深めることを重視している。

指導に当たっては、鑑賞もまた創造活動の一環であるため、生徒が対象に能動的に接し、感性や美意識、想像力を豊かに働かせ、対象や事象を造形的な視点で深く捉え、作品などに対する自分としての意味や価値をつくりだすことが求められる。そのため、今回の改訂で新設された〔共通事項〕との関連を図り、造形の要素の働きや全体のイメージや作風、様式などで捉えることについての理解を深めるなど、生徒が関心をもって具体的によさや美しさを感じ取れるように指導を工夫することが必要である。

〔共通事項〕

表現及び鑑賞の学習において共通に必要な資質・能力を次のとおり育成する。

- (1) 「A表現」及び「B鑑賞」の指導を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。
 - ア 造形の要素の働きを理解すること。
 - イ 造形的な特徴などを基に、全体のイメージや作風、様式などで捉えることを理解すること。

4 工芸に関する質疑応答

問1 工芸において「思考力、判断力、表現力等」をより豊かに育成するために考慮すべきことは何か。

「思考力、判断力、表現力等」をより豊かに育成するためには、発想や構想と鑑賞に関する資質・能力を総合的に働かせて学習が進められるようにすることが大切である。

例えば、「A表現」の項目の「(2)社会と工芸」において器を制作する題材について考えると、器をつくること自体が学習の中心ではない。ここでの学習の中心となるものは、使う人の側から生活や社会を見つめるなど社会的な視点に立った発想や構想や、使う人が求めるものと機能性と合理性、生活や社会を心豊かにする工芸の働きなどについて考えることである。これらは器の制作において発想や構想をするときも、鑑賞するときにも働く中心となる考えといえる。発想や構想に関する資質・能力や鑑賞に関する資質・能力を育成する観点から、学習の中心になる考えを明確にすることにより、鑑賞したことが発想し構想を練るときに生かされ、また、発想や構想をしたことが鑑賞において見方や感じ方に関する学習に生かされるようになる。それぞれの資質・能力が相互に関連して働くようにすることを積み重ねることが、より豊かで創造的な「思考力、判断力、表現力等」の育成につながると考えられる。

問2 [共通事項] (1)アの「造形の要素の働きを理解すること」とはどのようなことか。また、指導する上で留意することは何か。

「造形の要素の働きを理解する」とは、造形の要素に着目し、その働きを捉えることができるように、形や色彩、素材や光などの性質や、それらが人の感情にもたらす様々な効果などについて理解することなどが考えられる。

例えば、[共通事項]のアの指導では、「A表現」(1)の「身近な生活と工芸」アの学習において身近な生活の視点に立った発想や構想をする場面では、既成の概念や常識にとらわれるだけでなく、それぞれ固有の特徴を体の諸感覚を働かせて捉え、理解できるようにすることが大切である。それに対して、(2)の「社会と工芸」アの学習における社会的な視点に立った発想や構想をする場面では、客観的な視点を踏まえて、形や色彩、素材や光などの性質や、それらが感情にもたらす効果などを理解していくことになる。

このように、造形的な視点を豊かにするためには、発想や構想をする場面、創造的に表す技能を働かせる場面、鑑賞において見方や感じ方を深める場面などで知識を活用しながら理解を深めることや、活動する中で、造形の要素の働きに気付くことをきっかけとして理解を深めることなどもある。そのため、必ずしも知識を習得してから活用するといった順序性をもって指導するものではないことに留意する必要がある。

5 書道に関する質疑応答

問1 「書に関する見方・考え方」とはどのようなものか。

「書に関する見方・考え方」とは、書の特質に即して物事を捉える視点や考え方をいい、感性を働かせ、書を、書を構成する要素やそれらが相互に関連する働きの視点で捉え、書かれた言葉や、歴史的背景、生活や社会、諸文化などとの関わりから、書の表現の意味や価値を見いだすことである。「書に関する見方・考え方」を働かせることによって、実感を伴って「思考力、判断力、表現力等」、「知識」及び「技能」が育成され、この過程の中で「学びに向かう力、人間性等」の涵養へと広がり、生活や社会の中の文字や書、書の伝統と文化と豊かに関わる資質・能力の育成へとつながることとなる。

問2 「共通事項」とはどのようなものか。

〔共通事項〕は、「A表現」及び「B鑑賞」の学習において共通に必要な資質・能力あり、「知識」に関する項目として示している。

〔共通事項〕

表現及び鑑賞の学習において共通に必要な資質・能力を次のとおり育成する。

- (1) 「A表現」及び「B鑑賞」の指導を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。
 - ア 用筆・運筆から生み出される書の表現性とその表現効果との関わりについて理解すること。
 - イ 書を構成する要素について、それら相互の関連がもたらす働きと関わらせて理解すること。

アは、「時間性と運動性」（言葉を書くことによる視点と用筆・運筆における身体運動）と「書の表現性」（重層的・複合的に合わさって生じる表現効果）に基づく視点である。

イは、「書を構成する要素」（線質・字形・構成・余白・墨色等、相互の関連がもたらす働き）と「造形性と空間性」（書を構成する要素を理解することで育まれる書の美を深く捉えること）に基づく視点である。

問3 「B鑑賞」における「風趣」とはどのようなことか。

風趣とは、線質、字形、構成等の要素の特性の働きによって生じる様々な表現性が重層的・複合的に合わさることにより、作品全体から滲み出る様々な趣や味わいをいう。

「B鑑賞」における、それら諸要素と表現効果や風趣との関わりに関する指導に当たっては、書のおよび美しさを生む諸要素及びそれらの特性の働きによって生じる表現性、表現効果や風趣のそれぞれの関係について、学習段階に応じて実感的に理解できるよう工夫し、書の表現の多様性について幅広く理解できるようにすることが重要である。

6 新学習指導要領を踏まえた現行学習指導要領における実践

(1) 音楽

新学習指導要領では〔共通事項〕が示され、知覚したことと感受したこととの関わりについて考えることで、思考力、判断力、表現力等に関する資質・能力を育成することとされている。

ここでは、「A表現」の(3)創作において、生徒が自由に音を出しながら音のつなげ方や重ね方などを試す中で、音楽を形づくっている要素の働きに気づき、それらが生み出す特質や雰囲気などを感じ取り、創作意欲を一層高めることをねらいとした実践例を示す。

具体的には、はじめに既習の技能を活用し主体的に旋律を創作する活動を行い、次に創作した旋律を他の生徒と共有する対話的な学習を行うことにより、アイデアやイメージを広げ、さらに複数の生徒の旋律をつなげたり、他の生徒の旋律に副次的な旋律を付けたりする活動を通じ、より深い音楽表現を探究する学習過程を設定している。また、音楽を形づくっている要素の働かせ方などを試行錯誤しながら、表したい創作表現について考える活動をより効果的に行うためICTを活用し、内容の取扱いに示された(3)及び(7)についても配慮している(表参照)。

なお、評価の観点については、文部科学省が示す移行措置に示されているとおり、現行学習指導要領の下の評価規準に基づいて設定している。


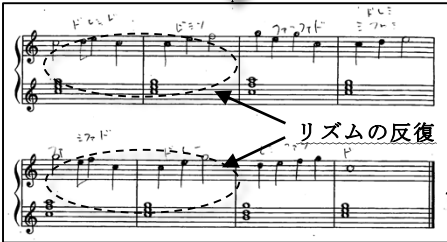
◆ 単元の指導計画(学習指導案)

単元名	メロディづくりに挑戦しよう		
単元の目標	これまでに学習したリコーダーの技能をもとに、表したいイメージと関わらせながら、和声に即した音のつながりを理解し、それらを生かしながら創作表現を工夫して旋律をつくる。		
新学習指導要領の指導事項	<p>「A表現」(3)創作</p> <p>ア 創作表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら、自己のイメージをもって創作表現を創意工夫すること。</p> <p>イ 音素材、音を連ねたり重ねたりしたときの響き、音階や音型などの特徴及び構成上の特徴について、表したいイメージと関わらせて理解すること。</p> <p>ウ 創意工夫を生かした創作表現をするために必要な技能を身に付けること。</p> <p>(7) 反復、変化、対照などの手法を活用して音楽をつくる技能</p> <p>(イ) 旋律をつくったり、つくった旋律に副次的な旋律や和音などを付けた音楽をつくったりする技能</p>		
本単元で重点的に扱う〔共通事項〕	ア 音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きを感受しながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考えること。〔リズム 速度 旋律〕		
新学習指導要領に関連する内容の取扱い	(3) 生徒の特性等を考慮し、内容の「A表現」の(3)のウについては(7)、(イ)又は(ウ)のうち一つ以上を選択して扱うことができる。 (7) 内容の「A表現」の(3)の指導に当たっては、即興的に音を出しながら音のつながり方を試すなど、音を音楽へと構成することを重視するとともに、作品を記録する方法を工夫させるものとする。		
評価の観点	音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能
評価規準	①リコーダーの音域や音色の特徴に関心をもち、イメージをもって音楽をつくる学習に主体的に取り組もうとしている。	①旋律やリズムを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気などを感受しながら、リコーダーの特徴を生かして、どのように音楽をつくるかについて表現意図をもっている。 ②旋律の特徴を知覚・感受しながら、反復、変化、対照などの構成を考え、表現したい音楽をイメージして音楽表現を工夫し、表現意図をもっている。	①和声に即した旋律をつくったり、副次的な旋律を付けたりする技能を身に付け、創造的に表している。

次程	学習内容	評価の観点		
		関	創	技
第1次	アルトリコーダーを用いて、8小節程度の和声伴奏に合わせた旋律を創作する。	①		①
第2次	他の生徒がつくった旋律を参考に、リズムや速度などの要素を変化させ、表現を工夫する。		①	
第3次	8小節の旋律をいくつかつなげて構成を工夫したり、副次的な旋律を付けたりにして表現を深化させる。		②	
第4次	つくった旋律を発表し、動画や音声ファイルとして記録し、創作した作品について客観的に振り返る。	①		

本時の目標（第1次）

- 1 和声に即した旋律をつくる技能を身に付ける。
- 2 即興的に音を出しながら音のつながり方を試すなど、音を音楽へと構成する活動に取り組む。

過程	学習内容	生徒の学習活動	指導上の留意点【評価の観点・方法】
導入	旋律づくり 技能の学習	次の事項について学習する。 ・和声音と非和声音 ・順次進行と跳躍進行	範奏や動画を用いて生徒に分かりやすく提示する。
	<p><メロディ創作のポイント></p> <ul style="list-style-type: none"> ・くり返し ←→ 変化させる (例) ドミソの和声音 <ul style="list-style-type: none"> ドミソ ドミソの非和声音 ドファ (ドレミファソの音) ・リズム ・高さ etc ・和声音と非和声音 ハモニー ← 順次進行 (音外順音) 跳躍進行 (音外と音) ・不定音。 		ICTの活用により、学習内容について明確化し、生徒の視覚・聴覚に訴えかける指導を実現する。
展開	旋律づくり	リコーダーの演奏を通じて音のつながり方を試しながら旋律をつくる。 【課題】 	生徒の表現意図を汲み取り、創作表現の技能について個別に指導する。
	作品発表	【生徒作品】  創作した旋律を発表する。 他者の創作した旋律を聴く。	タブレットやmp3プレイヤーを用いて、旋律の構成音をどのように変化させると自らの表現意図に近づくかを、生徒が試行錯誤しながら即興的に創作活動に取り組めるよう工夫する。
		対話的な学びの場面として設定し、深い学びへとつながるよう位置付ける。	音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し工夫できるよう支援する。
まとめ	振り返り	自らの旋律と、他者の旋律から聴き取った内容をまとめる。	他者の旋律の特徴が知覚・感受されるよう助言する。【技①・発表】 発表時の内容に着目させる。 【関①・ワークシート】

(2) 美術

「思考力、判断力、表現力等」をより豊かに育成するためには、発想や構想と鑑賞に関する資質・能力を総合的に働かせて学習を進めることが大切である。

ここでは、「A表現」の(1) 絵画・彫刻において自画像を制作する題材について行った実践例を示す。学習を終えたとき、自画像を描いたことだけが生徒の中に学びとして残るのではなく、形や色彩、光などの造形の要素の働きによって自己の内面を表すことができ、対象を見つめ感じ取ったことや考えたことを基に、どのような創意工夫をすることが大切かという考え方を学びとして身に付けられるようにすることが重要である。

◆ 単元の指導計画（学習指導案）

単元名	自画像—自己を見つめて—（全18時間）						
単元の目標	自己を深く見つめ感じ取ったことや考えたことなどを基に、自己の心情や意図を創造的に表現することができる。						
評価の観点	美術への関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力			
評価規準	「自画像」というテーマを基に、自己の内面を見つめて表現することに関心を持ち、主体的に主題を生成して構想を練ったり、主題を追求しようとしている。	「自画像」というテーマを基に、感性や想像力を働かせて、自己の内面を見つめて感じ取ったことから主題を生成し、表現形式の特性を生かして、形体、色彩、構成などを工夫して創造的な表現の構想を練っている。	意図に応じて材料や用具の特性を生かし、表現方法を工夫して、主題を追求し表現している。	他の生徒の作品のよさや美しさ、作者の心情や意図と表現の工夫などを感じ取り、作品などについて理解を深めている。			
指導計画	学習内容			関	発	創	鑑
課題の把握と発想・構想（6時間）	<ul style="list-style-type: none"> ●課題について理解する。 ・参考作品を鑑賞し、作者の主題、意図と表現の工夫などについて考える。 ●自己の内面や自分を取り巻く状況などから主題を生成する。 ・イメージを言葉で表したり、作品のタイトルを考えたり、アイデアスケッチを描いたりして主題を生成する。 ●主題を基に構想を練る。 ・主題を基に、アイデアスケッチなどにより形体、色彩、構成などを工夫して構想をまとめる。 			○	○		
制作（10時間）	<ul style="list-style-type: none"> ●構想を基に自分の表現意図に合う表現方法を工夫する。 ・構想したことを基に表現の意図に応じた材料や用具を吟味して使い、制作をする。 ●主題を追求し、表現を深める。 ・主題を追求し、表現方法を工夫しながら制作をする。 			○	○	○	
鑑賞（2時間）	<ul style="list-style-type: none"> ●他者の作品から、作者の主題、意図、創造的な表現の工夫などを感じ取り、理解する。 ・自分の作品にタイトルを付け、作品について構想した表現意図の説明を記述し、発表する。 ・相互に作品を鑑賞し、批評し合う。 ・ほかの生徒の作品のよさや美しさ、作者の心情や意図と表現の工夫をワークシートにまとめる。 						○

◇内容：自分の顔をじっくり観察することを通して、今の気持ちや性格などを考え、自己の内面を自画像で表現する。

◇指導の流れ

①ウォーミングアップ 画家のデッサンを模写（2時間）

※模写を通して、【共通事項】造形の要素の働きを理解する。相互批評を通して気付きを生み出す場面をつくる。



生徒作品

○ 最初は全体的に、光と影の境目を不自然にならないように描こうとして、ぼやけていたけど、周りの人と比べ合っ、もう少し明暗をはっきりさせても良いと思い、修正しました。

生徒の振り返り



生徒作品

○ 眉毛、目、目線など一つ一つの角度で男っぽかったり女っぽかったりするのだと思いました。どういう形を描きたいのかを陰でも表現することができるかと分かったので意識して描けるようにしたいです。

生徒の振り返り

②画家の自画像鑑賞（0.5時間）

※表情や顔の角度、配色などに注目し、作者の心情や表現意図と表現の工夫を感じ取りながら、構想を練る。

感じ取ったことや考えたことなどを基にした発想や構想

生徒が自然や自己、生活などを見つめ感じ取ったことや考えたこと、夢や想像などから主題を生成し、それらを基に表現形式の特性を生かし、形体や色彩、構成などについて考えて創造的な表現の構想を練ることができるよう指導することが大切である。

③デッサン（3.5時間）

※鏡を見ながら観察し、どのような表情や顔の角度なら自己の内面を表すことができるのかを考える。他者との意見交換の場面も設定しながら、多くの視点から自己と向き合う機会をつくる。



④油彩制作（10時間）

※F6号キャンバス使用。

発想や構想をしたことを基に、創造的に表す技能

生徒一人一人が発想や構想したことを基に、自分の表現を具体化するために、意図に応じて材料や用具の特性を生かし、表現方法を創意工夫し、主題を追求して創造的に表すことができるよう指導することが大切である。

〔共通事項〕造形の要素の働きを理解すること

形や色彩、材料や光などの性質や、それらが人の感情にもたらす様々な効果などについて理解する。



⑤相互鑑賞（2時間）

※全ての作品を掲示し、自作についてプレゼンする場面と他者の作品に対して感想を伝える場面をつくる。

美術作品などの見方や感じ方を深める鑑賞

生徒の作品については、相互鑑賞の対象とするとともに、言語活動の充実を図ることが大切である。その際、生徒一人一人の異なった感じ方や考え方を尊重するとともに、価値意識をもって討論や批評し合ったりするなどの対話的な活動を通して、対象の捉え方や感じ方、表現の違いとそれぞれのよさなどに気づき、自他の作品の特性や個性を踏まえて見方や感じ方を深めるようにすることが必要である。

<生徒の感想>

- 人間の体は肌色と言われるが、その中にもたくさん色が存在していると思った。油絵は色の奥深さを学ぶのにとっても良い画材だと感じた。とりあえず完成はしたが、まだこだわりたいところが多くあるので、次回は自分が満足できるような作品を作りたい。また、他の人たちの作品の中で顔のパーツを捉えるのが上手な人や、影のつけ方が上手な人がたくさんいて、自分の課題を見つけることができた。相互鑑賞会は楽しいと思った。
- 歳を重ねていくにつれて、だんだんと絵から離れていく中、授業としての自画像制作を通して、自分を見つめ直すことができた。どうしたら自分の雰囲気、自分らしさを表現できるのかを色や表情などの構図を考えながら制作に取り組むのは大変だったが、できたときは達成感があった。
- 顔は頬などを立体的に見せるのは簡単だったが、鼻や口、耳などは形が複雑で、光の反射や影の表現が難しかった。模写とは違い、鏡を見ながら顔を描くので、目鼻口の位置や大きさ、バランスを取るなどがとても難しかった。今回の自画像では、自分らしさを見つけることができず、表現できなかった。相互鑑賞の中で、自分の特徴をしっかりとポーズや表情に変換して描いている人の話を聞き、自分を表現できていて凄いと感じた。自分ももっと表現できるようになりたいと思った。

(3) 書道

高等学校芸術科書道においては、文字文化を柱に据え、新しい時代の社会・世界のなかでの書道教育の価値・意義について理解し、書における見方・考え方を生かしながら、主体的・対話的で深い学びの実現が求められている。このため、表現と鑑賞が相互の関連を図りながら書の現代的意義や普遍的価値などについて考え、書のよさや美しさとはどのようなものかを実感させる学習を行うことが重要である。

ここでは、双鉤填墨についての技法を書の伝統と文化という側面からの理解や、古典としての歴史的価値に気付かせ、蘭亭序の臨書に対する価値や意義について学習を行った実践例を示す。

○ 単元の指導計画（学習指導案）

単元名	漢字の書（全6時間）			
単元の目標	双鉤填墨（蘭亭序）から得る表現効果と価値について考察する。			
評価の観点	関心・意欲・態度	書表現の構想と工夫	創造的な書表現の技能	鑑賞の能力
評価規準	生徒自ら蘭亭序への、興味・関心を持ち、主体的に表現効果を高めようとしている。	書表現の諸要素を理解し自らの意図に基づいて構想し、表現を工夫している。	全体の構成や線質、字形について思考しながら効果的に双鉤填墨の技能を身に付け表している。	鑑賞と表現が相互に関連していることを理解し、知識を活用しながら、書のよさや美しさを感じている。
次 程	学 習 内 容			関 構 技 鑑
第1次	蘭亭序を鑑賞し、第一印象（風趣）をもとに半紙に4文字「天朗気清」の試書を行い、文字の流れや運筆のリズムを意識した行書を理解する。			
第2次 第3次	双鉤填墨を行う「天朗気清」部分を拡大したものを配布し、字形の流れや筆順等に気を配りながら、籠字をとる。			○ ○
第4次 第5次	墨の濃淡等について注意を払い、双鉤填墨を通して、書の良さや美しさを味わう。			○ ○
第6次	蘭亭序の表現と鑑賞を通して得た気付きや価値について捉え直し、第1次と比較しながら、表現効果を思考し、「天朗気清」を半紙に清書する。			○ ○

○ 第4・5次の指導と評価の計画（例）

共通事項ア「知識」
①時間性と運動性 ②書の表現性
これらの視点を踏まえ、本時の目標を設定する。

1 本時の目標

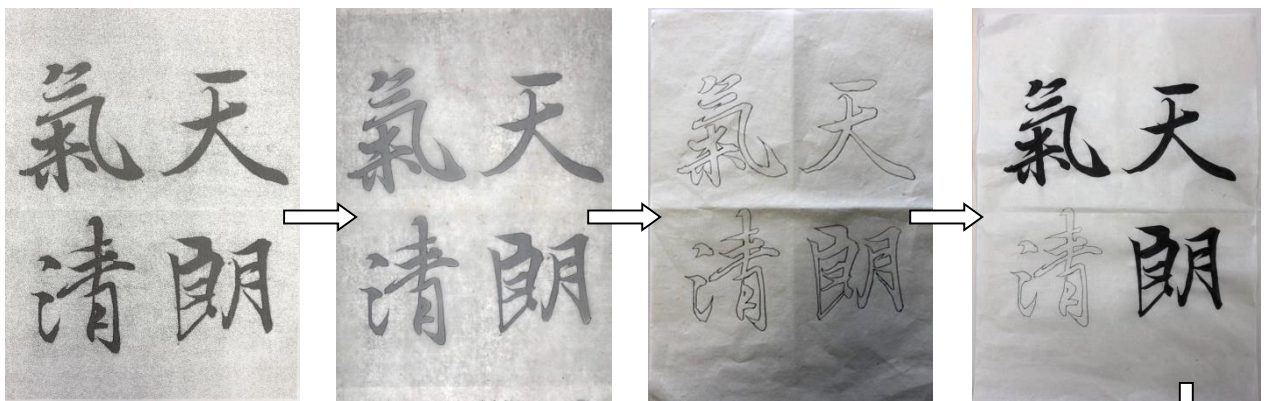
- (1) 蘭亭序（教科書）を観察しながら、運筆、字形、筆順等に注目しながら双鉤填墨について理解させる。
- (2) 蘭亭序（教科書）と双鉤填墨したものとを比較しながら、表現効果や風趣について考察させる。

2 学習指導案の例

過程	学習内容	生徒の学習活動	指導上の留意点
導入	学習内容を想起確認	鉛筆で籠字をとったときの配慮した点、感想等を質問する。	『対話的な学習』教科書の蘭亭序を鑑賞させながら、籠字全般の感想を生徒から引き出す。
展開	墨を磨る。 籠字の中に墨を填める。 ワークシートを活用し、まとめる。	墨を磨る。 小筆を使い、籠字の中に墨を填める。 できあがった蘭亭叙の双鉤填墨を鑑賞し、感想等をまとめる。	磨墨について説明し、濃度調整の指示を行う。 教科書にある蘭亭序を鑑賞させながら、筆意や字形、筆順等を確認させ、取り組ませる。 小筆の穂先を使いながら、墨を填めるよう机間巡視する。 ワークシートを活用させながら、文章形式で記述させる。
まとめ	グループワーク（批評活動）	グループに分かれて、批評会を行う。 次回の学習内容を確認する。	教科書の蘭亭序と見比べながら、自己の双鉤填墨についての感想をワークシートにまとめグループで共有させる。 次回、半紙に清書することを促す。

学習例 蘭亭序を双鉤填墨してみよう。

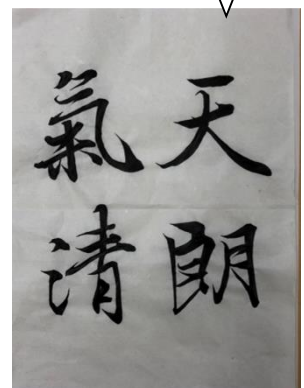
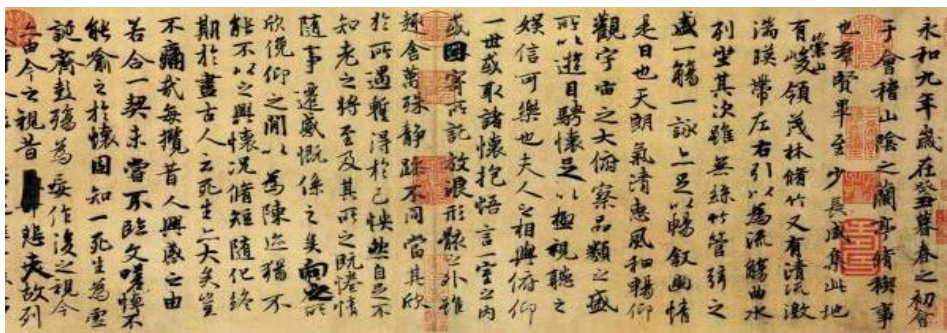
- ①拡大した原本を用意する。 ②鉛筆で籠字をとる。 ③籠字した雁皮紙 ④小筆で墨を填める。(填墨)



◆双鉤填墨のポイント (画像は、光村図書)

蘭亭序を鑑賞しながら、運筆のリズムや穂先の方向、筆順等細部にわたり注意しながら学習を深めていく。

⑤完成作品



3 ワークシート(例) (ループリックによる自己評価)

学習目標	(1) 蘭亭序(教科書)を観察しながら、運筆、字形、筆順等に注目しながら双鉤填墨について理解させる。 (2) 蘭亭序(教科書)と双鉤填墨したものとを比較しながら、表現効果や風趣について考察させる。			
指標	課題を十分達成できた	課題をおおむね達成できた	課題を残すが達成できた	課題を多く残した
創造的な書表現の技能	双鉤填墨において、籠字の構成や線質、字形、墨を填めることについて思考・配慮しながら積極的に表現することができた。	双鉤填墨において、籠字の構成や線質、字形、墨を填めることについて思考しながら、表現することができた。	双鉤填墨において、籠字に気を配り、全体の構成や線質、字形、墨を填めることについて取り組むことができた。	双鉤填墨において、籠字の構成や線質、字形、墨を填めることについて理解することができなかった。
評価		○		
鑑賞の能力	鑑賞と表現が相互に関連していることを理解し、知識を活用させながら、双鉤填墨における書のよさや美しさを感受することができた。	鑑賞と表現が相互に関連していることを理解し、双鉤填墨における書のよさや美しさを感受することができた。	鑑賞と表現が相互に関連していることに気付き、双鉤填墨のよさや美しさを感受することができた。	鑑賞と表現が相互に関連していることや、双鉤填墨のよさを理解することができなかった。
評価		○		
感想	【学習指導要領 書道 I】 A 表現 イ(ア)用具・用材の特徴と表現効果との関わり ウ(ア)目的や用途に即した効果的な表現 B 鑑賞 イ(ア)線質、字形、構成等の要素と表現効果や風趣との関わり (イ)日本及び中国等の文字と書の伝統と文化 (I)書の伝統的な鑑賞の方法や形態			

・言語活動の充実
・文字文化の価値と意義
記述を通して、生徒の気付き、捉え直し、作品の変容等、生徒の達成状況を見取る。

